

年頭言 「魚介アレルギーと地球環境」

新型コロナウイルス感染拡大による医療逼迫の中、新たな年を迎えました。刻一刻と変化する状況と未曾有の負の連鎖に粛々と対応する日々が続いております。“互助”の精神の大切さを改めて感じている次第です。

昨年末に日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会がハイブリッド形式で開催されました（下図）。長崎大学からは芦田美輪先生による膠原病86例のレイノー症状と発汗機能の調査結果、浅井幸先生による重症薬疹最近10年のまとめを発表しました。そして嬉しいことに芦田先生が本学会の優秀演題賞銀賞を受賞しました。一昨年の本学会においても当教室の松本 舞先生が同じく優秀演題賞銀賞を受賞されています。2年連続で長崎大学皮膚科が受賞できたのは教室員皆の研鑽の賜物です。

本学会で会頭をされた高知大学佐野栄紀先生の開会の言葉はとても印象的でした。

“皮膚科学における免疫アレルギー領域について、我々は非常に小さいものから始まったのかもしれないが、今や大きなウェイトを占める。さらなる発展のためには皮膚だけに留まらない幅広い知識も重要と考え、本会では植物免疫も取り上げた。（室田メモより）”

この考え方は自然科学が医学の礎であるというポンペの医学教育の方針にも通じます。

長崎大学皮膚科では松本舞先生を中心として水産学部との共同研究により新規抗原同定を行っています。食物アレルギーのシンポジウムで高知大学からの魚介アレルギー新規抗原同定を大変興味深く拝聴したのでご紹介します。

症例はアカウオによる職業性魚介アレルギーの患者で、魚によって手湿疹や接触蕁麻疹を繰り返しているようでした。CAP-IgEは多くの魚でclass1~2と比較的低値でしたが、市販の魚介抗原プリックテストおよびプリックトゥプリックテストでは多種の魚介に陽性反応を認めていました。免疫ブロット法を行われ、代表的な魚介アレルギーの抗原であるパルプアルブミンへの反応は陰性でしたが高分子蛋白への反応が見られたようです。この高分子蛋白をプロテオミ

クスにより同定したところmyosin heavy chain(MYH)でした。MYHリコンビナント蛋白を合成し、ほかの魚介アレルギー患者でもMYHへの陽性反応を確認できたそうです。このような臨床スタイル、つまり臨床で未解決の問題をゴリゴリの基礎研究によって解明し、患者にフィードバックするという流れは私の大好きな手法です。

さらに視野の広がる情報を得ました。魚のMYH含有量は魚の住んでいる海水の温度の影響を受けるそうです。食物アレルギー症状は摂取されるアレルゲンの量にも依存します。しかも私たちの摂取する魚は今や世界中から届けられています。とすれば、魚介アレルギーは地球環境の影響を多いに受けていると想像されるのです。

私たちもアレルギーの解決を通して食の安全と地球環境の関わりについて長崎から発信できるよう知見を積み上げてまいります。

第50回 日本皮膚免疫アレルギー学会総会学術大会
THE 50TH ANNUAL MEETING OF THE JAPANESE SOCIETY FOR CUTANEOUS IMMUNOLOGY AND ALLERGY (JSCIA)

FACE THE SELFISH SKIN
「利己的な皮膚に対峙するサイエンス」

~~2020年8/28(金)~30(日)~~
2020年12/22(火)~24(木)

会場
高知市文化プラザかるぼーと

会長
佐野 栄紀
(高知大学医学部皮膚科学講座 教授)

DCRM
ATOL
QYU
DEPARTMENT OF
DERMATOLOGY
KOKU FERRAL SCHOOL